

ハハトイ墓参

シベリア紀行

畑 中 淨 園

ソ連の戦車砲から発射する砲弾は頭上に落下し、麓の陣地からは肉迫攻撃の爆音が響いてくる。一日の夜、山上の陣地に終戦の知らせがあった。翌朝白旗を持って山を降り捕虜の身となった。日本へ帰還させるといふ嘘言にだまされ次々にシベリアへ送られた。

我々残留の軍人と満州鉄道会社

の職員の方がた合わせて六〇〇人が最後の輸送となった。一〇月二

二日の夜、荷車から降ろされたのが、人口およそ二千人のハハトイ

という寒村であった。一月に入ると零下三〇度、初めて体験する

この寒さは骨髄も凍る思いであった。

作業は伐採・運材・製材であった。この重労働に昼弁当は鶏卵大

の黍団子二個。一二月下旬から発疹チブスが蔓延し四〇度の高熱が

一週間続き、心臓の衰弱と脳症のため次々にたおれ、一二月暮れから翌年三月にかけて二〇〇余名が

日ソ中立条約を無視して、その一

軍は国境の町満州里・ハイラルを

突破し一四日には、我々が陣地を構築していた興安嶺に姿を現した。

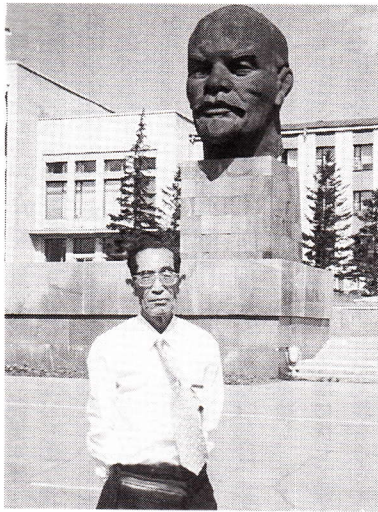
老いの身にシベリア墓参を決意

させたのは、こうした悲惨の最後をとげられた方がたの面影であった。

平成七年七月四日(火) 朝七時三十分のレールバスで出発、東海道新幹線・上越新幹線で新潟に着いたのが午後二時。北海道・東北・千葉・関西・九州などほとんど全国からホテルに集合。夕食時に自己紹介、初めての方も、墓参という同意識で一〇年既知の如くであった。

前方に蛇行している河がアムール川であろうか。シベリア上空に入ったのか、下界一面タイガが広がり、シベリアに来たのだという実感がわいてくる。機は下降をはじめた。やがてエンジンが切られたのか機内は急に静寂となる。沈黙の何分間を経て弱いショックを感じてイルクーツク空港に着陸した。時に午後九時一五分。日本との時差は二時間であるので時計をなおそうとすると、添乗員のKさんが、ここは夏時間であるから、日本時間のままでよいとのこと。

新潟からイルクーツクまで直線距離でおよそ八〇〇km、フライトの時間は四時間と四五分、地図を見るとほんの一飛びである。しかし五〇年前の捕虜の身にとつては、祖国は気の遠くなるようなはるかかなたで、大地の果てに感じるであった。入国審査を終わって空港のターミナル前に集合した。通訳のアンドレという青年が待っていた。長身で温厚なタイプ、年は二〇歳で独身という。ホテルの本海はついに見ることができない。バスが迎えにきて乗車、何とフロントガラスにひびが入り、座席のシートは一度も洗濯したことがない様子、日本ではとうてい考えら



ウランウデのレーニンの頭像

イルクーツクは人口五〇万、東西に長いシベリアのほぼ中央で、一八五二年のデカブリスト(一二)月党の乱で逮捕されたロシアの知識人がこの地に流刑されて築いた街という。シベリア経済の中心地で毛皮の集散地として栄えた。日本のシベリア出兵(一九一八〜一九二二)はこの地が最西であった。

七月六日(木) 午前三時三〇分起る。一時ごろ二階の食堂で夕飯、床、ほとんど寝るひまもない。荷物を整理してロビーに集合。五時にホテルを出発。再びアンカラ川を渡って駅につく。駅はコンクリートの荒塗りで、きわめて殺風景。六時一〇分シベリア鉄道は発車した。バイカル湖の南端を迂回して東進する。八時を過ぎたころ通訳のアンドレさんがバイカル湖が見えますとい

うので、皆一斉に窓辺に寄りかか

る。木の間に湖水が見える。一時ごろもまだ湖が散見できる。

バイカル湖は南北六四〇km、東西八〇km、その面積は三一、五〇〇km²、びわ湖の五〇倍、因みに岐阜県の面積は一〇、五九五km²である。最深部は一七四二m、透明度は世界一といわれる。

午後二時一〇分ウランウデに着く。八時間に亘るシベリアの旅であった。迎えのバスでホテルゲゼルにつく。レンガ造りの三階建て、上品で古典的。一休して市内見学に出る。この市は人口四〇万人で、岐阜市の人口とほぼ同じである。ブリアート自治共和国の首都である。人口の六割がモスコ系のブリアート人で、我々日本人のルーツといわれる。容貌は日本人と見分けがつかない程よく似ていて親みがわく。レーニン広場でバスを降りる。巨大なレーニンの頭像がある。

立っており、ここは官庁街である。市役所の隣のオペラ劇場は日本人捕虜の作業で建てられたとガイドの説明があった。飢えと寒さの中でダワイビストレー(早くしろ)とせき立てられた同胞の姿が目に見え

る。七月七日(金) 起床六時、朝食七時、出発八時二〇分。バスの外装はトゥートンカラーで格好よいが乗車してまた吃驚。内装は汚れて擦り切れ、おまけにフロントガラス

は小穴があき、そこから四方に亀裂が入っている。ハハトイまで二七〇km。四時間の距離であるが道路に破損箇所があるので五時間かかるという。とにかく一直線である。地平線を見ながらステップ地帯を時速一〇〇kmで走る。対向車はほとんどない。道幅は広いが舗装は中央のみ。

九時三〇分、ブリアート共和国とチタ州の境でトイレ休憩。ところがトイレらしきものはない。案内のトゥヤーナさんにきくと、この自然がそのままトイレですとの答えで一同爆笑。ハハトイへあと

れないことである。ここはロシアである。日本の物差しはあてはまらない。バスは市街に入り、アンカラ川を渡ってホテルインツェリストに着く。アンカラ川はバイカル湖から流れ出る唯一の川で、下流はエニセー川となって北極海に注ぐ。ホテルは九階建ての近代建築である。この地では九階までそれ以上の建築は許されないという。一時ごろ二階の食堂で夕飯、床、ほとんど寝るひまもない。荷物を整理してロビーに集合。五時にホテルを出発。再びアンカラ川を渡って駅につく。駅はコンクリートの荒塗りで、きわめて殺風景。六時一〇分シベリア鉄道は発車した。バイカル湖の南端を迂回して東進する。八時を過ぎたころ通訳のアンドレさんがバイカル湖が見えますとい

うので、皆一斉に窓辺に寄りかか

る。木の間に湖水が見える。一時ごろもまだ湖が散見できる。

バイカル湖は南北六四〇km、東西八〇km、その面積は三一、五〇〇km²、びわ湖の五〇倍、因みに岐阜県の面積は一〇、五九五km²である。最深部は一七四二m、透明度は世界一といわれる。

午後二時一〇分ウランウデに着く。八時間に亘るシベリアの旅であった。迎えのバスでホテルゲゼルにつく。レンガ造りの三階建て、上品で古典的。一休して市内見学に出る。この市は人口四〇万人で、岐阜市の人口とほぼ同じである。ブリアート自治共和国の首都である。人口の六割がモスコ系のブリアート人で、我々日本人のルーツといわれる。容貌は日本人と見分けがつかない程よく似ていて親みがわく。レーニン広場でバスを降りる。巨大なレーニンの頭像がある。

立っており、ここは官庁街である。市役所の隣のオペラ劇場は日本人捕虜の作業で建てられたとガイドの説明があった。飢えと寒さの中でダワイビストレー(早くしろ)とせき立てられた同胞の姿が目に見え

る。七月七日(金) 起床六時、朝食七時、出発八時二〇分。バスの外装はトゥートンカラーで格好よいが乗車してまた吃驚。内装は汚れて擦り切れ、おまけにフロントガラス

は小穴があき、そこから四方に亀裂が入っている。ハハトイまで二七〇km。四時間の距離であるが道路に破損箇所があるので五時間かかるという。とにかく一直線である。地平線を見ながらステップ地帯を時速一〇〇kmで走る。対向車はほとんどない。道幅は広いが舗装は中央のみ。

九時三〇分、ブリアート共和国とチタ州の境でトイレ休憩。ところがトイレらしきものはない。案内のトゥヤーナさんにきくと、この自然がそのままトイレですとの答えで一同爆笑。ハハトイへあと



丘の上からウランウデを望む

一時間半という所で下車。野の花を摘む。原色の色とりどりの花を束にした。墓へ供えるためである。はしる。

シベリアの夏は六・七・八月の三か月で、自然のいのちが一斉に姿を顕した感じである。携帯してきた小形の温度計は三二度を指している。空気が乾燥しているためそんなに暑さを感じない。

名も知らぬ村落を通り抜ける。所々に耕地が見えてくる。広大な農地にトラクターが小さく動いている。ソフォーズであろうか、コルホーズはほとんど解散したらしい。しばらくすると山の形にどこか見覚えがある。伐採にかよった

と立派に成人した我が子の姿を凍土の下でどんなにか喜んでおられるであろう。

親思う子の思いより

なお深き

親の喜び如何なるらん

昨晚この地に着いた先発隊によって午前中に祭壇がととのえられて白幕で覆われている。墓地の隅には白樺の若木に七夕の短冊が結びつけられた。今日は日本の七夕の日である。

「先請弥陀入道場」以下四句の

伽陀諷誦の中、二人の女性遺族によって白布の幕が引き降ろされ、「日本人墓地」と記した墓碑銘と、その下に二一四名の死没者名を刻んだ銘板が眼前に姿を現した。それは遙か東方の祖国日本に向けて建てられている。

除幕式が終わり、五〇回忌の法要にうつる。導師焼香の後、团长S氏の弔辞、遺族・軍人代表の弔辞がつづいた。村行政府長官（村長）アレクセーエフ氏、チタ州赤十字委員会の代表の挨拶があり、「仏説阿弥陀経」の読経となる。篤志で参加された長野県の竹村禪師の同誦を得たことは幸せであった。読経中全員の焼香がつづき、

今によみがえり
しばし佇む古井戸のもと
近所の主婦や老人・子供が数人集まってきた。かつて覚えたロシア語を思い出して雑談をする。

最後にハハトイ村長をはじめ、心ある村民が不慣れの手つきで焼香をしてくれた。その国境を超えた人間としての痛みを共にする姿に胸せまるものがあった。こうして五〇回忌の法要が終わった。墓前に捧げた供物は全部、ここに集まった村の子供や大人に分配された。キャラメル・ガム・アメ玉・缶ジュースなど、両手で握りしめて喜び子供達の姿を、地下に眠る方々も微笑んで下さったであろう。

三時四〇分、グンダレ氏の木材工場の食堂で懇親会が開催された。折柄急に雨が降りだした。雨を降す空模様でないのに。地下に眠る。五〇年前共に働いた娘さん達で、当時の日本人の名まえを覚えていた老婆もいる。アーニアさん、か、「もう帰るのか」という悲しみの涙であろうか、そのように思えてならない。車中の者も同じ思いであろう。うつ向いてしばし静寂がつづいた。

別れ路を惜しむがごとく
さながらに雨降りそそぐ
ハハトイの丘
バスは一路西に走る。アンドレが急におカミが出ましたと告げる。前方森の中から二匹の狼が出てきた。よく見ると日本の野犬の恰好で、どう見ても狼らしく



ハハトイ墓標の前で

ない。シベリアの狼も進化したのかもかもしれない。

五時間ばかり走りつづけてウラウデ郊外についたころバスが停車した。エンジンがかからない。運転手がバスから降りて点検している。長時間の乗車で疲れきっている。時計は一〇時を指している。真赤にもえた太陽が遙か西の地平線に沈む。

バスの故障がなおったのか思ったより早く運転手が席についた。一同乗車。

ホテルゲゼルについて夕食時、添乗員のKさんが深刻な顔をして「明朝のウラジオストック行きの飛行機が燃料不足のためとり止めになった」と告げられた。一同唯然として言葉がでない。やがてその対策について噂々調々色々な意見が交わされたが、結局イルクーツクまで戻れば何とか飛行便があるからということでKさんに一任しておちついた。

七月八日(出)午前中、ウランウデの商店街で買い物。商品は中国製と韓国製が多く、豊富であるがインフレのため高価である。午後一二時一〇分発のシベリア鉄道の駅

に集合した。ところが発車時刻になってもホテルから荷物が届かない。不安がつる。仕方なく発車時間をおくらせてもらう。荷物を積んだホテルの車がやっと到着。大慌てで乗車する。一二時三〇分警笛も鳴らさず発車した。約二〇分のおくれである。日本ではとても考えられないことであるが、ロシア流に改めて感謝する。二〇余も車両を連ねた列車はゆるやかなカーブを回ってひたすら西進する。やがて右手にバイカル湖が再び見えてきた。木の間ごしに湖水浴を楽しむ水着姿が散見される。同じような水着姿で農耕している若い婦人の姿も目につく。蛇に刺されてさぞ痛いだろうと余計な心配をしても無駄というものか。

午後八時三〇分、イルクーツクの駅に着く。再びアンカラ川を渡ってホテルインツォリストに入った。七月九日(日) 午前八時四五分空

港に着く。結局ウラジオストック行きの飛行機はなく、ハバロフスク行きに搭乗。双発のプロペラ機で座席はガタガタで機体がゆれる。添乗員のKさんがこの辺がハハトイの上空ですといわれる。時々機

体が大きくゆれる。このあたりで空中分解して墜落したら、恐ろしく発見されることなく朽ち果てるであろう。遺言を書きしても無駄であろうなど思っているうちにハバロフスク空港に無事着陸して胸をなで下す。フライトは二時間半であった。

ハバロフスクは人口七〇万といわれる極東の大都市である。かつて捕虜の時代に、ここに日本人学校ができて、各ラーゲルから選んで、共產主義教育を施し、「日本新聞」を発行してラーゲルに分配するなど、赤化教育の本拠であった。日本人墓地に参拝する。この墓地はよく整備されている。エリチン大統領が訪日の途次、ロシア政府の代表として初めて参拝したのがこの墓地であった。

午後七時、シベリア鉄道に乗ってウラジオストックにむかう。列車はウスリー江に沿って南下している。外はとっぷり暮れて見えず、車中仮眠。

七月十日(月) 午前九時ウラジオ

ストックに着いた。ハバロフスクから一四時間の乗車であった。丘の上のホテルで朝食をすまして市街

を見学。革命戦士の広場から丘に登ると金角湾が一望できる。いうまでもなくここはロシアの極東艦隊の根拠地である。はるか沖あいには駆逐艦らしきものが望見できる。写真はOK。ソ連邦時代には考えられないことである。軍艦もソ連時代の三分の二に減り、それも老朽化して修理費の予算がないのでそのまま停泊していると聞いた。市街を走っている車は日本の中古車が目立つ。中には日の丸タ

クシーの車が商標もはずさずそのまま走っている。自家用車の個人名も消さないで走っているのにも驚いた。ホテルウラジオストックで、シベリア最後の夜をむかえた。墓参り。七月一日(火) 飛行場への途中、

平成八年度

事業計画(案)

- 4月 執行部会
- 5月 執行部会、役員会、監査会、会報「文化財やまと」発行
- 6月 執行部会、総会ならびに研修会(講演会)
- 7月 小松茂美先生文化講演会、「古今和歌集について」東氏館跡庭園泉水浚渫及び阿千葉城跡管理作業奉仕
- 8月 新能協賛
- 10月 役員会
- 11月 執行部会、日帰り研修旅行
- 12月 執行部会、役員会
- 2月 執行部会
- 3月 役員会、一泊研修旅行

紀州紀行

高橋義一

三月一日〜二日、町文化財
保護協会会員三〇名、研修の旅、
白浜温泉宿に一泊。

▼・・・▲

和歌山城は絶景

天守から春の城下を一巡す

芭蕉の句碑「見上ぐれば桜し

もうで紀三井寺」は、二六〇

余の石段を登る。

梅見上げ芭蕉句と詣つ紀三井寺

天下の奇勝、白浜三段壁の洞

窟。むかし熊野水軍見張り番

の宿した跡窟。

海賊の窟より春潮噴きに吹く

右の洞窟には、「十六童子」

付き、日本最大の青銅像弁才

天（座高三・五米）を祭る。

夜は「ホテル千畳」に一大酒

宴。カラオケ・ワルツ・郡上

踊り。

弁天さま荒布も乱れワルツかな

清姫、大蛇に化身して、安珍

へ紅蓮の恋をし、追いかけて焼

き殺したと住僧熱弁。昭和五

七年、時の皇太子ご夫妻聴講

（写真展示）され、我ら男女

も喜悅。実の蛇の恋婚は、う

ららかな五月。しかしそれ以

上の感激は、大収蔵展示館に、

国宝十二面千手観音をはじめ、

重文の仏たちを拝したこと。

蛇の恋ひたすら愉快す道成寺

関西国際空港は、一兆六千億

円かかり、一機の発着料九八

万円也は世界一。

機首上げて海の空港風光る

帰路は阪神高速湾岸線を走り

日本一の臨海工業地帯にただ

感嘆。

臨海の工業地帯春走り貫く

大阪高架道で市内通過、こん

な所に人が住むかと誰かが言

ったとき。
高架駆すビルの谷吹く鯉のぼり

紀三井寺を訪ねて

井俣初枝

西条八十のコミカルな詞に、中
山普平の軽快なメロディーの「鞠
と殿さま」の歌がすぐ口ずさみた
くなる和歌山への旅は、これまた、
あたらしい。歴史上の人物・有名

ガイドさんの歯切れのよい語り口
がよけい旅心を誘ってくれる。

NHKの名君吉宗はまだ記憶に

近江の三井寺も行ったことのない
私がずいぶん遠いところへ来た
もんだと長い石段の下から山の
腹を見上げた。三月だといえども

な民俗学者・文学者のでたところ
だし見るものきくものすべて私に
とって新鮮にうつつた。
明るい太陽と、黒潮おどる南国
というイメージを描いていたもの
の今年は、気候が不順でいつまで
も寒く早咲きのサクラで有名な西
国第二番の礼所紀三井寺の蕾もさ
すが固かった。紀三井寺は枯色の
名草山の中腹に建っていた。

参詣者の多いこと。俗塵を
はなれた辺りな場所をえら
んでわざと建立されるのだ
ろうか。考えたところで何
も浮かんで来ない。

紀三井寺とは、吉祥水・
楊柳水・清浄水の三霊泉が
あることから近江の三井寺
と区別して、紀伊国の一字
を冠して紀三井寺と呼ぶよ
うになったという。

長い石段が参道になって
いるのだがその中段のここ
ろに美しい朱塗りの楼門が
そびえていた。国指定重文
である。楼門を潜り、石段

道成寺清姫の執心鐘入

長い石段が参道になって
いるのだがその中段のここ
ろに美しい朱塗りの楼門が
そびえていた。国指定重文
である。楼門を潜り、石段



執心鐘入

を登りきった正面台地に鐘楼が建っていた。これは、天正十六年（一五八八）の建立。境内の高台にそびえる朱塗りの塔婆「多宝塔」は、まことに優美で由緒を物語るたはずまいで、もちろん国指定重文である。その他、観音さま、木造梵天帝釈三天王の立像等がいただいたしおりに記されてあった。

本堂前でお遍路さんに出会う。霊所三十三所第二番の札所としての信仰を集めて紀三井寺の寺連は今日までの隆盛をたどって来たのではないだろうか。

境内から和歌浦方面が展望できた。ここで浄園先生に聞く機会をなくして残念だったが聖人にゆかりのある和歌を詠まれたところではないかと。いまだにそのことが脳裏からはなれない。

水仙、菜の花の真盛りの南国で風花のような雪にも見まわれたけれど「和歌の浦に潮みちくれば潟をなみ芦辺をさしてたづ鳴きわたる」山部赤人の歌も思い出すことが出来た。知らないことを知ることによって旅の楽しさ、ありがたさをしみじみ思わせていただく今日この頃である。

紀州の文化財に学ぶ

一 甚 甲 須



和歌山城にて

春まだ寒き 大和路を
一泊二日の 古寺古城
偲ぶ由緒は 遠き世の
鷺の森にぞ つきにけり
バスの中より 伏し拝み
涙にむせび み名称え
尊い御堂を なつかしむ

次は古城の和歌山城
文化に遺る 石だたみ
曲がりくねった 石段を
登れど尽きぬ 曲がり坂
千歳に残る 人の世の
幾久しきを 念じつつ
やとついたらと 城の中

紀州の殿さま 偲ばせる
遺品展示に 眼をうつす
天守閣まで 登りつめ
一望千里の 和歌山市
眺めて紀の川
文左衛門
みかん舟こそ 後の世の
歴史となりて 世に知らる

次に深園 紅葉園
腰かけ石や 池眺め
西の丸こそ 優雅なれ
散策すれば 茶のかおり
和服姿の 貴婦人の
手なみもやさし 忘れず
ああ和歌山城の 美わしき

次は待ちかね 紀三井寺
二百三十一段の
急な石段 登りゆく
息もはずめば みなひと
話の声も 絶ゆるなり
やとつうれしや ついたぞと
そこは鐘楼 六角堂
急ぎ小足で 本堂へ
仰げば古き 西国の
二番札所と 知らざる
十一面の 観世音
秘仏とききて 伏し拝む
線香の煙 堂に満つ

古き建築 なつかしく
多宝塔をば よく眺む
昔のひかり ここにあり

次は広望の 和歌の浦
わが目の前に 現れる
これぞ尊き 真宗の
み親のみことば 口にする
「わが年きわまりて、安養浄土に
還帰すといえども、和歌の浦わの
片男波の、寄せかけ寄せかけ帰ら
んに同じ、一人居て喜ばば二人と
思うべし、二人居て喜ばば三人と
思うべし、その一人は親鸞なり。
われなくも法は尽きまじ
和歌の浦
青草人のあらんかぎりは」

はるか沖に 合掌す
ほとけのみ名を 称えつつ
いそいで バスに戻りては
屋を間近に 道成寺
急いでぐるぐる 仁王門
千手観音、仏・菩薩
心しずかに 礼拝す
安珍清姫 絵巻物
案内の声に きき入れば
老若男女 堂に満つ
安珍塚に 立ち寄れば
拝む人また 数多し

白浜出湯に 宿りては

今日の疲れを 湯のけむり

今日の歴史を 夢まくら

一夜明ければ 白浜の

名所古跡は 三段壁

エレベーターで 洞窟へ

荒波ほゆる 闇の世を

今も昔も 変わりなく

丸木の舟は 語りおり

海の護りは 弁才天

海の男の 安穩を

幾久しきに まるるなり

(一)鷺の森にて

車中より偲びて若葉古寺の跡

真宗の教えに春日鷺の森

(二)和歌山城にて

曲がり道道登るや古き石だたみ

天守閣五十五万の紀州藩

紀の川や文左衛門はミカン舟

西の丸紅葉溪園茶のかおり

(三)紀三井寺にて

二三一段登り鐘楼六角堂

み名称之十一面の観世音

高男波一望千里の和歌の浦

和歌の浦わが真宗の祖師の声

多宝塔昔の光りここにあり

四道成寺にて

仁王門くぐりて安珍塚拝み

堂に入りみな諸共に合掌す

仏菩薩千手観音慈悲に満つ

安珍や清姫に聞くこの身かな

大蛇道鐘は溶けても鳴り響く

教え聞く老若男女絶え間なく

大広間絵巻の教え風通る

若夫婦妻宝極楽の志貴紙買ひ

親に 孝行

子に 慈悲

妻に 宝極楽

一家 繁栄

道成寺管主印

私達が文化財に学ぶということ

は、これを遺してくれた、昔の人の心との交流であると思う。文化財にはいのちがあり、自然の光がある。私達はその光の中で共に学び、ともに喜びあって、尊い人生を全うしたい。そのためには郷土を愛し育ててゆかねばならないと思う。

今回のこの意義のある旅を催していただいた先輩の諸先生、先達者のご苦労に深謝し、ここにお礼を申し上げて愚筆を止めさせていただきます。

平成七年度 事業報告

10月31日 開催について(旅行会社を招く) 役員会、日帰り研修旅行計画について 13名

11月13日 日帰り研修旅行を実施、京都市、泉涌寺と東福寺 52名

11月17日 執行部会、一泊二日研修旅行の企画(旅行会社招く)

11月27日 執行部会、役員会の開催と一泊二日研修旅行の詳細計画につき再度旅行者を招致

12月27日 役員会、事業中間報告、一泊二日研修旅行計画他 22名

1月29日 執行部会、一泊二日研修旅行会員募集の件他

2月14日 執行部会、「文化財収蔵展示館」設置要望の再度陳情書案文の検討他

3月4日 執行部会、一泊二日研修旅行準備、役員会の開催について

3月11日 一泊二日研修旅行実施、和歌山城、紀三井寺、白浜三段壁(熊野水軍の基地)道成寺、関西空港等視察見学 31名

3月13日 役員会、「文化財収蔵展示館」設置要望の陳情書の再提出について、「文化財やまと」原稿募集他 18名

7月19日 執行部会、東氏館跡庭園清掃について

7月29日 東氏館跡庭園、特に今回は池泉の浚渫も含めて清掃の奉仕活動を行う 32名

8月7日 薪能「くるすざくら」協賛

10月14日 副会長有代信吾さん他界さる

10月15日 故有代信吾さんの葬儀に多数の会員参加

10月23日 執行部会、日帰り研修計画、役員会

文芸欄

うすうすと山は弥生の紀三井寺

木嶋 泉

注連飾子等緋い兼ねし左纏
細りゆく月に見られて猫の恋
先走りするへりくつを呑む四温

俳句

本田 村人

四月十一十二遅雪記録かな
春屋を透けて桃色猫の耳
蕎麦殻の枕がなじむ遠蛙

雑 詠

細川 優

恋猫の又回りきて啼く夜かな

黒岩 きくゑ

川虫を取る人影や水温む
川もやの流れ静かや猫柳
寒空を少しひく日や燕舞い
彗星の尾の不気味さや春の宿

東福寺にて

田中 まさを

参道の舞妓は派手や薄紅葉
大伽藍連らねて秋日斜なり
三門の歴史も高し秋の天
ゆく秋や秘仏に香華手向けいて
通天の紅葉は匂う如きかな

紀三井寺

井俣 初枝

紀の国へ寄する想いや梅の花
下萌の石段一步紀三井寺
春浅し夜を覚めてきく海の風
涅槃図の隅に控えしかたつむり

よどかけを替えて地蔵の花の顔

山下 照代

風の道探り母娘の大昼寝
初雪を踏みしめ音がついて来る
麗かや杖で登りし紀三井寺

横枕 千代子

焼き鮎の尾鰭の塩のほどのよき
竹たわむ音して吹雪く夜なりけり
風よけし土手の蓬の良く伸びて

桑田 和子

城若葉一日の風を育てており
葉桜の影ゆらゆらと掘蒼し
城跡や風に若葉の鳴るばかり

日置 繁

身を投げて蚯蚓の字に灼けし道
かんじきが新兵器となる雪払い
丹精を巻かぬキャベツが花笑う

直井 すす江

俊霄花のうぜんかすち祠かすち小さきお歎堂
佗助の名におもいかけ佇みぬ
怠け癖木の芽浮かしをこもりいて

井俣 初枝

人住まぬ旧家の暗き昼チ、ロ
釜鳴りの音幽かなり寒椿

て着きし宝塔の前
若き日に登りし思い出たどりつつ

道成 寺

名優らそれぞれに女の情念をたく
みに演じし絵の美しく
安珍も清姫もいまはみ仏となりて
安けしみ堂中座に

須甲 甚一

幾とせの歴史を語る洞窟の丸太木
舟の夢は広がる
闇の世を暗きがまに照らしつつ
弁才天は黙して座す

日置 智恵子

この街は子等の住む町夕映えの
美しきことに救われしかな
路の葉にうけし山水ほる苦く
幼は口をとがらせて吸う
論じいる『戦後五十年』亡き人の
心はどこに命ある者

矢野原 幸子

木材の不況長びきて林道の
かしこに藤の花房が垂る
新緑の五月の森にねころんで
風の声轟の鳴く声も聞く

短歌

土松 新逸

紀三井寺
二〇六段登りてなおも四六段数え

敬 弔



本会副会長
有代信吾殿

『大和町史』（史料編・通史編上・下巻）『大和町の文化財』の編集に多年に亘ってご尽力下さり、近年は当町文化財保護審議会の会長、町史料編続編の編集副委員長、郷土史研究会副会長として当町の文化事業に多大の貢献をして下さいました。昨年七月ごろから体調を害せられ、十月十四日、八十三歳の生涯をとりられました。ここに謹んで哀悼の意を表します。



本会会員
栗飯原高照殿

今年一月一日、六十九歳で逝去されました。この日早朝、明建神社の神事を執行され、その夕刻急性呼吸不全で急逝されました。氏は東胤行の山田庄入部以来、同時に勧請された明建神社（妙見宮）の神官として第三十九代を継がれました。同家や同神社には、指定の文化財・妙見菩薩縁起・万留帳など貴重な史料が保存されており、町史の編集にご協力下さいました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

平成八年 四月末日現在

會員名簿

(順序不同)

一 剣一

山下運平(顧問)	二四〇六	佐藤富貴子	二八八九	畑中淨園(副会長)	二四四一	遠藤賢逸	二二二一	遠藤光平	三九八一
旗 勝美(顧問)	二〇三一	山本みね子	二六七一	畑中真澄	二四四一	渡辺明夫	二六九五	遠藤周一	二八九〇
村瀬喜八	二二二八	豊鷺見美代子	二八三五	石神莞生	二四一三	木島三郎	三五九〇	滝日義一(理事)	三〇六二
山下真一	三四九五	一 大間見一		稲葉春吉	二五〇三	矢野原吉夫	二一三九	滝日 治	三四〇六
河合俊次(理事)	二二四六	村井正蔵(監事)	二二三三	黒岩きくゑ	二四六〇	一 河辺一	二六〇二	齋藤太門	三九五〇
畑中澄子(理事)	二五〇七	青木新三	二四三六	寛 明代	二五三二	清水幸江(理事)	二〇一九	松森 茂	三九二二
畑中定夫	二一六八	日置 繁(理事書記)	二二五四	三島秋男(理事)	二四六一	横枕千代子	二三四九	加藤一男	二八七〇
小池久江	二五七六	大野紀子	二二三〇	桑田和子	二四一九	清水テル子	二〇二一	清水 定	二七一〇
山下ふみえ	三三二七	野田英志(理事)	二二八五	桑田渥見	二四四六	前田 孝	二一〇一	日置元衛	三四一七
加藤正恵	二一〇七	小野江暹量(理事)	二七二六	桑田信夫	二四一八	前田 鈴	三六六六	粥川 溜	三三七八
高橋 明	二四八八	清水一作	三〇八六	黒岩弘美	二四五八	白田とも子	二二五〇	本田欽一(理事)	三一六〇
日置照郎	二〇七二	山下直美	三九三八	井俣初枝(理事)	二七五八	白田百合子(理事)	二〇四六	野田嘉明	三〇四三
加藤文蔵	二八〇二	池田充彦	三〇九〇	青地正男	二四四七	岩谷敏子	二〇六三	尾藤佐紀子	二三五三
佐藤光一(理事會計)	三三〇一	小野江勉	二七二五	大井静子	二三三八	岩谷ゆう	二三八八	加藤登美子	二八七〇
田中 和久	二二〇〇	池田栄枝	二二八五	大井正明	二八九四	岩谷ひとみ	二六八三	滝日和子	三〇六二
高橋義一(理事)	三七九二	池田道子	二八七九	旗 清子	四一七〇	岩谷千代子	二二一一	一 栗果一	
河合 恒	二三五八	日置智恵子(理事)	三〇五二	桑田アサ子	二四三九	一 神路一		島崎増造(監事)	二二三六
河合芳英	二三〇四	坪井政夫	四〇九二	井上妙子	三五〇八	森 忠敬(顧問)	二〇八三	増田洋子	四〇四一
加藤小式	二二二九	松井賢雄(理事)	三九九一	沢原 勝	三二五〇	白田尊徳	三七三〇	算政之助(理事)	四〇三一
奥村千代子	二〇二二	古田 忠	四〇九〇	山田武司	二四七五	羽生 清	二二七一	中山周左門	二七二八
武藤正文(理事)	三一九〇	藤代順行	三〇六〇	一 徳永一	四一八二	山田真人(理事)	二二一四	武田信康	二二八四
田仲龍子	二二六一	大野一道	二二三〇	木島 泉(理事)	四一八二	一 牧一		鷺見豊夫	二七八八
山下昭代	二四〇六	佐藤義子	四〇一〇	鷺見 清	二〇〇五	金子政子	三四二六	野田光誠	四〇二七
畑中節子	四一五六	玉木吉郎	三四一五	鷺見おと	二一八九	滝日準一(理事)	二七〇五	一 古道一	
佐藤八重子	三三〇一	青木ふじ枝	二二〇三	直井すゞ江	三五九二				
		畑中文字	二三四一	小野木花子	二七四七	矢野原幸子(理事)	二〇七七	粟飯原常人	二二六二
		畑中初枝	三四七四	青木ユリ子	三四七七	田中まさを	二〇六七	土松康二	二七二九
		新蔵 守	二三七五	日置哲夫	四五一九	水野志づ子	二六一〇	日置真一	二六六二
		野田八重子	二一六二	一 小間見一		山内孝一	二六一六	土松貞二	三九八〇
		高橋叙子	三七九二	平沢 勤(理事)	三九三七	木島洋女	二五九一	日置 昇	三六三六
		河合芳江	二二四六	一 万場一		土松新逸(会長)	二七三一	遠藤米吉	三六三七
		佐藤富貴子	二八八九	畑中淨園(副会長)	二四四一	遠藤賢逸	二二二一	遠藤光平	三九八一
		山本みね子	二六七一	畑中真澄	二四四一	渡辺明夫	二六九五	遠藤周一	二八九〇
		豊鷺見美代子	二八三五	石神莞生	二四一三	木島三郎	三五九〇	滝日義一(理事)	三〇六二
		一 大間見一		稲葉春吉	二五〇三	矢野原吉夫	二一三九	滝日 治	三四〇六
		村井正蔵(監事)	二二三三	黒岩きくゑ	二四六〇	一 河辺一	二六〇二	齋藤太門	三九五〇
		青木新三	二四三六	寛 明代	二五三二	清水幸江(理事)	二〇一九	松森 茂	三九二二
		日置 繁(理事書記)	二二五四	三島秋男(理事)	二四六一	横枕千代子	二三四九	加藤一男	二八七〇
		大野紀子	二二三〇	桑田和子	二四一九	清水テル子	二〇二一	清水 定	二七一〇
		野田英志(理事)	二二八五	桑田渥見	二四四六	前田 孝	二一〇一	日置元衛	三四一七
		小野江暹量(理事)	二七二六	桑田信夫	二四一八	前田 鈴	三六六六	粥川 溜	三三七八
		清水一作	三〇八六	黒岩弘美	二四五八	白田とも子	二二五〇	本田欽一(理事)	三一六〇
		山下直美	三九三八	井俣初枝(理事)	二七五八	白田百合子(理事)	二〇四六	野田嘉明	三〇四三
		池田充彦	三〇九〇	青地正男	二四四七	岩谷敏子	二〇六三	尾藤佐紀子	二三五三
		小野江勉	二七二五	大井静子	二三三八	岩谷ゆう	二三八八	加藤登美子	二八七〇
		池田栄枝	二二八五	大井正明	二八九四	岩谷ひとみ	二六八三	滝日和子	三〇六二
		池田道子	二八七九	旗 清子	四一七〇	岩谷千代子	二二一一	一 栗果一	
		日置智恵子(理事)	三〇五二	桑田アサ子	二四三九	一 神路一		島崎増造(監事)	二二三六
		坪井政夫	四〇九二	井上妙子	三五〇八	森 忠敬(顧問)	二〇八三	増田洋子	四〇四一
		松井賢雄(理事)	三九九一	沢原 勝	三二五〇	白田尊徳	三七三〇	算政之助(理事)	四〇三一
		古田 忠	四〇九〇	山田武司	二四七五	羽生 清	二二七一	中山周左門	二七二八
		藤代順行	三〇六〇	一 徳永一	四一八二	山田真人(理事)	二二一四	武田信康	二二八四
		大野一道	二二三〇	木島 泉(理事)	四一八二	一 牧一		鷺見豊夫	二七八八
		佐藤義子	四〇一〇	鷺見 清	二〇〇五	金子政子	三四二六	野田光誠	四〇二七
		玉木吉郎	三四一五	鷺見おと	二一八九	滝日準一(理事)	二七〇五	一 古道一	
		青木ふじ枝	二二〇三	直井すゞ江	三五九二				

細川 優 (理事)	二八六一
清水克巳	二八六二
清水行雄	三九〇八
歳藤 堅正	三九七九
金子藤男	三〇七五
長谷川順一	三九一四
清水久子	三九〇八
一名血部一	
有代真一	三七九一
有代和夫	二二〇一
尾藤 由	三三三〇
森下正則	三四一三
下広茂一	三八九五
佐尾チドリ (理事)	三五四四
立石春枝	三八八五
鷺見昭三	三四三一
一島一	
森藤 幸 (顧問)	二七〇六
森藤雅毅 (理事)	二六八四
須甲甚一 (理事)	二六六七
山田長次 (理事)	三六四八
山田昌枝	三六四八
森 数雄	二五五四
山田 良	二七九一
田中 篤	二七九二
奥田昌明	二五二〇
直井篤美	二六二二
此島修二	三六五九
直井洋子	二六二二
雉野尚子	三五六四

平成 7 年度 決算書

平成 8 年度 予算書 (案)

(収入の部) (単位: 円)

(収入の部) (単位: 円)

項 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
前年度繰越金	138,185	138,185	0	
会 費	1,583,000	1,539,000	△44,000	
会 員 費	313,000	329,000	16,000	正会員 2,000×158 家族会員 1,000×13
特別会員費	1,270,000	1,210,000	△60,000	日帰研修 7,000×52 宿泊研修 27,000×30 役員会 2,500×18
補 助 金	80,000	80,000	0	
寄 付 金	1,000	58,000	57,000	
諸 収 入	815	208	△607	
合 計	1,803,000	1,815,393	12,393	

項 目	予算額	前年度予算額	増 減	摘 要
前年度繰越金	41,184	138,185	△97,001	
会 費	1,819,000	1,583,000	236,000	
会 員 費	329,000	313,000	16,000	正会員 2,000×158 家族会員 1,000×13
特別会員費	1,490,000	1,270,000	220,000	日帰研修 8,000×40 宿泊研修 28,000×40 役員会 2,500×20
補 助 金	80,000	80,000	0	
寄 付 金	1,000	1,000	0	
諸 収 入	816	815	1	
合 計	1,942,000	1,803,000	139,000	

(支出の部)

(支出の部)

項 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
会 議 費	120,000	131,927	11,927	
総 会 費	50,000	66,000	16,000	
役員会費	70,000	65,927	△4,073	
事 業 費	1,515,000	1,503,983	△11,017	
研 修 費	1,340,000	1,314,063	△25,937	日帰研修 351,585 宿泊研修 855,000 研修助成 107,478
会報発行費	75,000	65,920	△9,080	
事 業 費	100,000	124,000	24,000	『大和町の文化財』購入 124会員に1,000円宛補助
事 務 局 費	22,000	0	△22,000	
消 耗 品 費	2,000	0	△2,000	
通 信 費	10,000	0	△10,000	
旅 費	10,000	0	△10,000	
県本部会費	80,000	72,000	△8,000	
積 立 金	60,000	60,000	0	重要史料出版基金の積立
予 備 費	6,000	6,299	299	
合 計	1,803,000	1,774,209	△28,791	

項 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
会 議 費	120,000	120,000	0	
総 会 費	50,000	50,000	0	
役員会費	70,000	70,000	0	
事 業 費	1,665,000	1,515,000	150,000	
研 修 費	1,540,000	1,340,000	200,000	日帰研修 320,000 宿泊研修 1,120,000 研修助成 100,000
会報発行費	75,000	75,000	0	
事 業 費	50,000	100,000	△50,000	
事 務 局 費	5,000	22,000	△17,000	
消 耗 品 費	2,000	2,000	0	
通 信 費	2,000	10,000	△8,000	
旅 費	1,000	10,000	△9,000	
県本部会費	80,000	80,000	0	
積 立 金	60,000	60,000	0	重要史料出版基金の積立
予 備 費	12,000	6,000	6,000	
合 計	1,942,000	1,803,000	139,000	

収 入 [1,815,393] - 支 出 [1,774,209] = 41,184 (8 年度繰越金)

編集後記

◆「今年の花は去年に似て好し
去年の人は今年に到りて老ゆ
始めて知る 人は老いて花にし
かざるを 惜しむべし落花 君
掃うことなかれ」(岑参)
今年も花が咲き散る時節となりました。右の唐詩の一節が身に
しみるこのごろです。

●会員の皆様、長かった冬を経て
お元氣のことと思います。

●会報第二十一号の編集をやっと
終わり、一息ついたところで。
いつもながら不如意の所が多く
申し訳ありません。会員の皆さ
まのきたんのないご意見をお寄
せ下さい。

●今春の紀州への研修旅行は大へ
ん評判がよかったと聞いていま
す。研修旅行は自己の見聞をひ
ろめ、かつ、会員どうしの親睦
も深まります。次回にも是非揃
ってご参加下さい。

●多忙の中を原稿をおよせ下さっ
た方がたに感謝します。気候不
順の折柄何卒ご自愛の程を。

(五月中流畑中)